

## 主題 高等学校における論説・評論の指導

司会者 森田 信義 (広島大学)

提案者 藤本 博文 (広島県立五日市高校)

堀 泰樹 (広島大学附属中・高校)

野宗 睦夫 (広島県立誠之館高校)

### 提案

## 高等学校における論説・評論の指導

——高校における論説・評論の指導の問題点とその克服の方策——

藤 本 博 文

私たちの日々の国語学習指導（現代文）の中で、論説・評論の学習指導は、文学教材（特に小説）の学習指導と並んで、ほぼ二本柱として実践されているのではないかと思われる。

指導者としても、作品の主題のとらえにくい小説教材よりも、作者の主張、思想などがとらえやすく、読み手の読み取りに振幅が少なくないと思われる論説・評論の指導には、教材研究もいささか安易に

取り組む姿勢はないであろうか。かく言う私自身もそうである。指導者自身は、生徒よりも圧倒的に読解力があるという自負（思いあがり）もあるし、何よりも指導書という強い味方もある。文学教材においては、指導書に解説してある事柄に満足できず、独自の切り込みや、解釈を検討していくのに、意外と論説・評論の場合は、指導書の解説で全体の要旨・展開・構成等を確認して、それでよしと

してはいないだろうか。

指導方法にしても、わりあい基本的な指導過程が定着している  
で、(それはそれで大切なことではあるか) それに、安座してはい  
ないだろうか。

一方では、もっと生徒にわがこととして引きつけて読ませたいと  
いう思いや、自分の指導は、「読解のための読解」——単なる言葉  
の置きかえにすぎないのではないかとという疑問や、ある一つの教材  
での学習指導が、他の教材(文章)を読解する際にも応用できる力  
となっていないのではないかとという疑惑も確かにあると思われる。

そこです、そもそも論説・評論を学習させる(学習する) おも  
なわらい・意義はどこにあるのかを確認してみたい。

### 1、論説・評論を学習させる(学習する) おもなわらい

ア、「学習指導要領」(昭和五十七年四月一日から適用のもの)

a、答申「自ら考え正しく判断できる力をもつ児童・生徒の育  
成ということを重視しながら、次のようなわらいの達成を目  
指して行う必要がある。」

b、高等学校の国語科の目標

「国語を的確に理解し適切に表現する能力を身につけさせる  
とともに、言語文化に対する関心を深め、言語感覚を豊かに  
し国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」

「国語I」 2、内容 B 理解

次の事項について指導する。

ア、話や文章の主題や要旨を叙述に即して的確にとらえ

ること。

イ、文章の構成や展開に注意して、書き手の考えの進め  
方や強調点をとらえること。

ウ、話や文章の内容を必要に応じて要約したり詳述した  
りすること。

エ、文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即し  
て読み味わうこと。

オ、文章を読んでものの見方、感じ方、考え方を広くし、  
人間、社会、自然などについて考えを深めること。

カ、文章の内容や形態に応じた表現上の特色、文体の特  
徴などに注意して読むこと。

キ、朗読を通して文章の読解、鑑賞を深めること。

### 3、内容の取り扱い 2

ア、教材は古典及び近代以降の文章の中から生徒の発達  
段階に応じて適切に選ぶようにし、読むことの学習に  
より生徒の読書力が高まるようにすること。

イ、文章の読解、鑑賞に当たっても書く活動の機会をで  
きるだけ設け、表現力、読解力の向上に役立つよう  
にすること。

### 現代文 2、内容

ア、論理的な文章について、主要な論点と従属的な論点  
との関係を考え、論理の展開や要旨を的確にとらえる  
こと。

イ、文学的な文章について、主題、構成、叙述などを確

かめ、人物、情景、心情などを的確にとらえること。

ウ、文章や作品の読解、鑑賞を通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり、発展させたりすること。

エ、文休、修辭などと内容との関係を考え、表現上の特色をとらえること。

オ、語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにすること。

カ、目的や内容に応じた様々な読み方を通して、文章の読解、鑑賞を深めること。

### 3、内容の取り扱い

3、参考文献を適切に利用して、調べたことを文章にまとめて報告したり、討議したりする機会を適宜設けるようにする。

## イ、増淵恒吉氏（高等学校国語科教育研究講座 第六巻）

「現代日本の教育は、平和と民主主義を擁護することを根本としなければならないし、しかも、日本の伝統を創造的に継承することを踏まえねばならない。そうした基盤に立って、自由と人権を重んじ、自主的・批判的精神に満ちた人間、高まちな識見をもつて的確に判断し、確固たる信念と強烈な責任感をもつて仕事を遂行する人間を育成することが教育に課せられた任務であらう。」

こうした人間の育成に「現代国語」の学習の受け持つ役割は大きい。とりわけ論説・評論の指導はこれと深くかかわりあ

う。」

「社会科におけるような価値目標をわらうとともに、国語科においては、論説・評論等を現在および将来において生徒が読む場合に、役に立ち、生かしようのような読解の態度、および技能をつけてやることを忘れてはならないのである。」

## 分析

### ア、「学習指導要領」

教育の目標として、「自ら考え正しく判断できる」ということが掲げられた。「自分で考える」ということが、ことさらに強調されるのはなぜだろうか。

現代の情報化社会において、情報を取捨選択していくことがいかに困難になっているか、一方では大がかりな大衆操作が仕組まれているとしか思われぬ昨今である。生徒を見ても、個性的なアクの強い生徒はすっかり影をひそめてしまった。学校という場においては、個性とかアクとかいうものを出すべきではないという性癖を彼らは身につけてしまったのである。そうだとすれば、その責任の一端は授業にもある。授業において、知識を一方的に注入するのではなく、物事の処理のしかた、方法を提示することが求められているのではあるまいか。

「国語Ⅰ」の内容に取り上げられたア、イ、ウあたりは、論説・評論の学習のねらいとしては定石となつていゝものである。しかし、これらの事柄をいかに生徒に自覚的意識的に学習させるかということが問題になつてくるはずである。

内容の取り扱いにおいて目につくのは、読書力、書く活動、

報告、討議といった事柄である。読解力を読解力としてすませるのではなく、読解力と表現の力への転移ということが非常に意識されているようである。すなわち、理解力表現、「読む」「書く」「聞く」「話す」という言語活動が単独で成立するものではなく、有機的に関連してはじめて力となることが明確にされているようだ。

イ、増淵恒吉氏の主張には、論説・評論を学習させる（学習する）二本の柱が明確にされていると思われる。

その一つは、まさに「教育基本法」で示された戦後の民主的人間の育成であり、「学習指導要領」の目標「自ら考え正しく判断できる児童・生徒」の育成ということにもつながるもので、どのような意味をもった論説・評論を読ませる（読む）かということ、的確な判断力と実践力の育成が求められていると思われる。

ここで、論説・評論の教材としてどのような読み物を選び、生徒に差し出してゆくかということがもんだいとなってくる。

人文科学（文学・芸術）、社会科学（哲学・倫理・思想・歴史・政治・経済・社会）、自然科学等広範な分野から、教材が発掘されることになるわけである。しかし、限られた教育課程において、我々は必要十分なものを差し出さなくてはならない。単に、生徒の認識を広めることだけに着目しているときりがないのであるし、それは国語科だけの任務ではない。

そこで、一つの指標として「国語Ⅰ・Ⅱ」にとり上げられた論説・評論形態の文章を拾いあげ、どのような内容を扱っている

かを整理してみた。（後掲資料「国語Ⅰ・Ⅱ教科書教材にみられる評論・論説教材」）

全体的にみると、一つの教科書での論説・評論教材の編成は、文明・文化に関わる内容（社会科学的内容）、自然科学的内容（特に現代の自然環境に関わるものが多いようだ）、言語・言語文化に関する内容の三部立ての形が多いようである。

その二は、「学習指導要領」のところでも触れたが、増淵氏が指摘しているとおり、国語科独自のわらひとなることがらである。生徒はしばしば、「学校の授業はわかるが、模擬テストではさっぱりわからない。」という質問をしに教官室を訪れるが、それは、生徒に「役に立ち、生かしようのような読解の態度および技能が身につけていない（身につけさせていない）」こととの証左であろう。

では、どのような点に留意して指導していけばいいのか。論説・評論の学習において考えられる目標・留意点について整理しておきたい。

## 2、論説・評論の学習において考える目標・留意点

長谷川孝士氏が、「豊かな国語教室原理・方法の探究」（石文書院）第七章論説・評論の教材研究と指導の方法の中で、一般的な目標として挙げておられるものは、

1 人生や社会の問題について、論理的に思考する能力を身につける。

2 論説体の文章の構成を理解し、論旨の展開のしかたをとらえ

る。

3 論説体の文章の要旨をとらえ、筆者の意図・立場・思想を理解する。

4 論説体の文章を読んで、論証や主張の根拠・理由などを正しくとらえる。

5 論説体の文章を読んで、筆者の思想・認識やその展開のしかたに対する自分の意見をもつ。

という五点である。

したがって、これらの指導目標がどのような方法で、どの程度達成されたかが論説・評論の指導の成否となり、問題点となるであろう。では、実際には、指導者(教師)はどのような点に留意し、工夫し、どのような問題点を感じているのであろうか。

3、論説・評論の指導において、現場教師が抱えている問題点

五日市高校国語科教師のアンケートから(表1) 参照

2、アの項目(どのような点に留意して指導しているか)

A、まず課題意識をつくる。改行段落相互の関係、キーワード・キーセンテンスをしっかり押さえて筆者の論理をとらえる。その後自分の身辺にひきつけて考えさせる。

B、「評論はあくまで一個人の意見に過ぎない。」という視点で、評論に対する論評(感想ではなく、あくまで論理的なもの)を生徒から引き出すよう努力している。

C、教材の精選。筆者の意見を身近な具体的な問題として考えさせる。

D、論の展開が明確になるようなプリント作成あるいは板書。

E、表現と内容がどのように関わっているかに注目している。

F、自分自身の生活・生き方の参考になるよう、内容(論理)、言葉をも自分のものにする。

G、言葉についても自分の言葉に翻訳する。考えることに重点を置いていく。

H、抽象的に表現された内容を、いかに具象化し、生徒自身の生活実感の中に演えさせさせるか。

H、難語句の解釈を単に用語の置きかえに終わらず、具体的に考えられるように配慮する。

2、ウの項目(問題点)

A、教師が一生懸命話していても、生徒の集中力が続かない。苦手意識に凝り固まった生徒がおり、最初から取り組む姿勢がほとんどない。

B、論旨を正確に把握させようとするとあまり、解説的、解釈的内容に偏ってしまい、それが結果的に生徒にその論を無批判に受け入れさせてしまっているような気がしている。

C、自分の意見・感想を書かせれば、それなりに掘り下げて書いてくれるが、口頭での意見発表、討議となるとあまりうまくいかない。

D、生徒の評論文に対する拒否反応、うまく興味づけができない。

E、本当の意味での生徒との討論をついサボってしまう。(気力と体力を消耗するので)

F、新しい知識には興味を示すが、自分が日頃感じたり、考えたりしていることをまとめ、自分の意見を持つという姿勢に欠ける生徒が多いように感じる。その指導のありか

G 思想・哲学といった方面に対する生徒の無関心。いかに生かせるかを真面目に考えようとしないう生徒をどう引き寄せるか。



。このアンケート用紙を五日市高校国語科の教師八名に配布して、お願いした。

。極めて抽象的な内容を尋ねたので、ずいぶん苦勞されたようであるが、快く協力していただいた。

。これによって、論説・評論の指導についての現場教師のかかえている問題点が明示されたと思う。

指導者（教師）が、最も力点を置いて指導しようとしている事柄は、それぞれ表現は異なっているが、先に挙げられた目標  
3、論説体の文章の要旨をとらえ、筆者の意図・立場・思想を理解する。

に相当するものようである。

しかも、その理解という場合、「生徒の身近にひきつけて、具体的に考える」「言葉の置きかえにおわらさない」「自分の言葉に翻訳する」という目標・留意点が挙げられている。

同時に、論説・評論の指導の中で、指導者が最も苦心しているのは、右の事柄であるともいえよう。

では、どのようにしてそれを可能にするか（方法）、どのようにしてそれを確認するか（評価）、これを問題点の「1」とできようか。

念のために、指導者が抱えている問題点もあわせて見てみると、F先生の意見に代表されるように、

「新しい知識には興味を示すが、自分が日頃感じたり、考えたりしていることをまとめる、自分の意見を持つという姿勢に欠ける

生徒が多いように感じる。その指導のありかた。」に見られるような生徒観を抱き、「生徒の身近にひきつけて、具体的に考える」「自分の言葉に翻訳する」ことに困難を感じていることがわかる。ひいては、目標の

5、論説体の文章を読んで、筆者の思想、認識や展開のしかたに對する自分の意見を持つ。

ということの指導をどうすればよいかに苦心していることもうかがえる。これを問題点の「2」としたい。すなわち、自分の考えを持ち、読解の力を表現力に転移させるためには、どういふ活動を仕組めばよいか、またその方法、評価はいかにあるべきか。そこで、先生方の工夫している点を列挙してみる。

A、キーワード、キーセンテンスを色をかえて、ハッキリ板書し、矢印などを多く使っている。論説・評論の教材では、板書を特に大切にしている。

学習プリントが作れたらいいなあと考えている。

B、教科書の教材には、当たり障りのない陳腐に感じられる作品がままあるので、投げ入れ教材の発掘に努めている。感想、意見を八百字程度で書かせ、生徒の意見文を分類して発表し、生徒の意見、感想を述べさせる。

C、「文化としての言語」（という教材）をする前に、「ことば」について考えさせるようなプリントを作り、身近な問題として考えさせるようにした。

D、「生徒の学習への主体的意欲を出させるには」——やっ

ばり生徒同士の、また教師も参加しての討議がある——なんとか気長に——この努力です。

E、内容把握については、できるだけ演習形式で、一人ひとりが考える時間を持つようになっている。

F、「隔絶の時代」(高橋和巳)をやる際、「人間疎外」の具体例として、「NHK二十一世紀は警告する」から、コンピュータによる人間疎外についてプリントして学習した。

A、論理の展開、文と文、段落と段落の関係などが明示されるような板書の工夫。

B、教材の発掘。

C・D、生徒の興味づけ、問題意識喚起のための副教材の活用。

E、演習形式の学習形態。

F、生徒の意見文による発表、および討議。

といったものを工夫しているようである。

中には、一般的、抽象的(アンケートがそういう様式であったから)な問いに対して、具体的な工夫も教示してくれた。これらの工夫によって、生徒がどのように反応し、活動し、力をつけていったかは、アンケートの範囲ではわからないが、様々な工夫、特に生徒に教材に対する興味や問題意識を持たせ、自分に引きつけて考えさせよう、自分なりの意見を表明させようとする工夫がうかがえる。

では、私自身の実践例によって、以上で確認してきた論説・評

論の指導の問題点が、どのように克服されているか、否かを浮き彫りにしてみたい。

ただし、ここで断わっておきたいのは、昨年度の実践例であること。ゆえに、生徒がどのように活動したか、生徒の反応については、極めて資料(生徒が書き残したものなど)不足であり、自身の記憶と主観に頼らざるをえないことを断わっておかねばなるまい。よって以下に紹介する私の指導案、並びに使用した学習プリント等によって、授業の様子と生徒の反応を想像していただけかなくてはならない。

#### 4、指導の実際

対象学年 第三学年

使用教科書および教材

【高等学校 現代文】(竹盛天雄編 第一学習社)

【地球の安全】(日高敬隆) (二期実施)

【面とペルソナ】(和辻哲郎) (二期実施)

「地球の安全」

1、筆者、教材観

この文章は、動物学者による自然環境破壊の問題を論じたものである。「地球の安全」という、誰もが目を向けるような題目から始まり、人間による自然破壊を論じるのに、人間が自然の外側の位置にいて自然を見るのではなく、人類も動物の一種であるという筆者の人間観で書かれている。動物の行う自然破

壊、人間の行う自然破壊、両者とも生きるためという目的は同じであっても違う点はどこか。動物は破壊のあとの環境が多様性を増す。人間は環境の多様性を壊し、単純化してしまう。ここに至っては、筆者は、人間よりむしろ動物の方が自然へのかわり方が好ましいと見なしている。人間が楽観的になっているうちに、問題は人間の力では収拾がつかなくなってしまうことや、自然に対する支配の力を過信してはいけないことなどが動物と人間を生物という一線上で比較することによって述べている。その比較の論法を学ばせたい。

また、具体例による説明で、読者に興味を抱かせ、説得力を持って読ませる。(これらの具体例については「理科I」で大体系学習済みで、読解上の障害はないようであるが、学習プリントにはなるべく多くの図を参考に用いたい)

全体の展開は、前段で述べた事柄を一見肯定しながら、それを打ち消す根拠を明示して、それを否定するという展開で、読

### 3、学習過程

第一時 限 目		学 習 活 動		指 導 上 の 留 意 点	
展開(一)	導入	1、題目から、全文の内容を想像させる。	1、題目の「地球の安全」という言葉から、何を連想するか、自由に発表させる。	2、 <b>「人間による自然の破壊」</b> が問題であることをおさえ、それが、なぜ <b>「確実な」</b> 恐怖といえるのかを考えさせることによって、本文に問題意識を持って取り組ませるようにしむける。	3、各形式段落冒頭の接続語を□で囲む作業を同時に与えて、本文に集中させるとともに、段落相互の関係をとらえるよう意識化させる。
		2、第一段を読んで、何について述べられているのか、問題提起は何かを確認させる。	2、 <b>「人間による自然の破壊」</b> が問題であることをおさえ、それが、なぜ <b>「確実な」</b> 恐怖といえるのかを考えさせることによって、本文に問題意識を持って取り組ませるようにしむける。		
		3、全文の通読(指名読み)			

者を筆者の提示する問題へグイグイ引っぱり込んでゆく力を持っている。この展開の仕方にも気づかせたい。

そして、**「人間と環境の問題」**について、小論文が課せられることも多く、これについての自分の意見を持つために大きな示唆を与えてくれるものではないだろうか。

### 2、学習目標

ア、評論文の説解を通し、論理的思考力を高める。

特に、各段落の冒頭の接続語に注目し、論理がどのように展開しているか、段落と段落の関係を押さえる。

イ、現代社会の抱える問題を科学的観点からとらえさせ、自分たちの生存についての認識を深めさせる。

特に、筆者の提示している問題は何か、それに対して、どうしていけばいいかという筆者の主張を的確にとらえる。

第二時限目	第三時限目
<p>展開(二)</p> <p>4、全文の通読(指名読み)</p> <p>5、全体の問題提起を確認するとともに、その解明のための問題を確認する。</p> <p>6、学習ノート(プリント)によって筆者が挙げている問題の内容とその対策をまとめさせる。</p>	<p>展開(三)</p> <p>7、前時の課題の確認。指名によって、対策を発表させる。</p> <p>8、特に(二)の問題点について取り上げ、その具体例と筆者の意見を本文に即して理解を徹底させる。</p> <p>筆者の言う「地球の安全」とはどういうことか確認させる。</p> <p>ノートに、自分のことはでまとめさせる。</p>
<p>4、前時の作業とともに、本文の疑問文に傍線を引かせ、筆者が取り上げている問題を明示するような作業を与える。</p> <p>5、4の作業結果の確認。生徒に指摘させる。</p> <p>6、個別学習なので、机間巡視によって、個々の作業の進み具合を見ては、適当な助言をする。</p>	<p>7、なるべく本文の書き抜きではなく、自分のことばでこなれた形でまとめたものを発表させる。</p> <p>8、人間と動物の破壊の違いを明確にするとともに、人間と自然とのかわり方についてどう考え方があり、どう問題なのかをおさえさせるようにする。</p> <p>9、ここまでやってきたことを確認するとともに、自分のことばで自分の理解で、全体の論旨をとらえているかを見るように心がける。</p>

#### 4、評価

ア、この実践の中で、私が意識的に取り入れたことは、

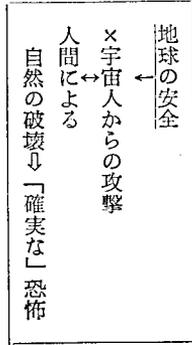
- 1、音読をただ、読みの確認に終わらせず、効率的に読ませるために、作業(線を引く、□で囲む)を取り入れたこと。
- 2、それによって、段落相互の関係、論理の展開についても意識化させるとともに、筆者が取り上げた問題を明確化させたこと。
- 3、学習プリント(学習ノートという名称で与えることが多

い)によって、学習の個別化を図ったこと。  
の三点である。

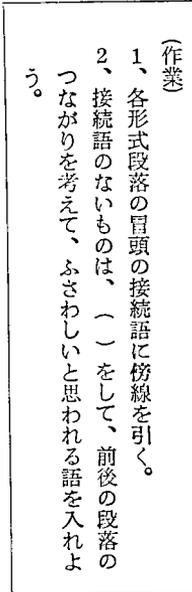
- 1については、生徒を本文に集中させることができたと思う
- 2の目的は私の解説不足もあって、段落相互の関係、論理の展開まで生徒は把握できたかどうかは、きわめてあやしい。
- 3については、三学年でもあるので、この問題ができればほぼ論旨はつかめていると考えて与えたのだが、はたしてそれで、学習目標が達成できたとかんがえられるか、諸先生方のご意見を賜りたい。

イ、意識的に除いたことは、アでもわかるように、意味段落に本文を分け、細かく内容の分析をして、段落の要旨、段落相互の関係、論理の展開等について詳しく指導をしていかなかったことである。

板書 1



2



一つのこと(ここでは、筆者の提示している問題とその対策がまとめられること)ができれば、イに述べたことは生徒には整理できうるのではないかと考えたのである。諸先生方の批判を受けたい。

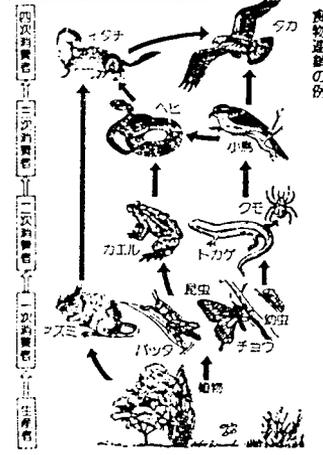
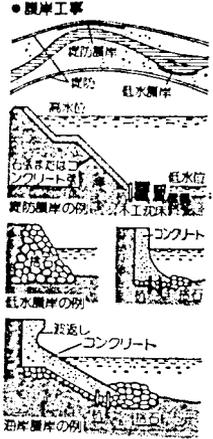
<p>地球の安全 教P 204 ↓</p> <p>日高敏隆 学習ノート</p>	<p>学習四、筆者が「問題」として挙げている事柄の内容と、その対策をまとめてみよう。(P 211)</p>	<table border="1"> <tr> <th>問 題</th> <th>対 策</th> </tr> <tr> <td>(1) 人間による自然破壊が、人類の滅亡を導く恐れがある。</td> <td></td> </tr> </table>	問 題	対 策	(1) 人間による自然破壊が、人類の滅亡を導く恐れがある。																																									
問 題	対 策																																													
(1) 人間による自然破壊が、人類の滅亡を導く恐れがある。																																														
<p>図 1</p> <table border="1"> <tr> <td>人間</td> <td>働きかけ</td> <td>自然(地球)</td> <td>変 化</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>大気・水の汚染</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>河川改修工事</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>工場建設</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>農地造成</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>道路・ダム建設</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>自然破壊</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>自然の浄化作用</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>自然界の回復力</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>生物資源</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> <tr> <td>人間</td> <td>人間の滅亡(の恐怖)</td> <td>自然(地球)</td> <td>人間</td> </tr> </table> <p>への影響</p>			人間	働きかけ	自然(地球)	変 化	人間	大気・水の汚染	自然(地球)	人間	人間	河川改修工事	自然(地球)	人間	人間	工場建設	自然(地球)	人間	人間	農地造成	自然(地球)	人間	人間	道路・ダム建設	自然(地球)	人間	人間	自然破壊	自然(地球)	人間	人間	自然の浄化作用	自然(地球)	人間	人間	自然界の回復力	自然(地球)	人間	人間	生物資源	自然(地球)	人間	人間	人間の滅亡(の恐怖)	自然(地球)	人間
人間	働きかけ	自然(地球)	変 化																																											
人間	大気・水の汚染	自然(地球)	人間																																											
人間	河川改修工事	自然(地球)	人間																																											
人間	工場建設	自然(地球)	人間																																											
人間	農地造成	自然(地球)	人間																																											
人間	道路・ダム建設	自然(地球)	人間																																											
人間	自然破壊	自然(地球)	人間																																											
人間	自然の浄化作用	自然(地球)	人間																																											
人間	自然界の回復力	自然(地球)	人間																																											
人間	生物資源	自然(地球)	人間																																											
人間	人間の滅亡(の恐怖)	自然(地球)	人間																																											

上は、第二時限目6の学習活動のところで配布、使用したものである。



(6) 廃棄物による地球の貧困化。

。変化しない人間の物質性。  
 。変化する人類の生み出すもの(科学技術)  
 人間にとって安全な地球を追求すること。



「面とペルソナ」

この文章は評論文としては、すぐれたものとして定評があり、かつてより多くの教科書で採用されているもので、よくご存じのものである。よって教材観等については省略する。

また、学習目標・学習過程についても詳述をさけるが、ポイントだけを紹介し、ここでは特に中心となった学習活動について報告する。

1. 学習活動 (大まかな流れ)

④⑤二種のケムシは違う植物を食う、純林になると一種のケムシしか住めなくなる。寄生バチは、親に成長しても卵を産むケムシがないことになるから存続できない。

ア、この文章ではやはり、指示語・接続語に注意させながら、論理的関係を明らかにさせた。

イ、論旨の把握の点では、面(顔面)とペルソナの、一見あまり関係のなさそうな語をどういう根拠で結びつけているかをとらえさせようとした。

ア・イとも、教科書への記号の書き込みやプリントによる個別学習を取り入れた。(学習ノート参照)

〈学習のねらい〉

(1) 指示語、接続語などの意味内容を正確に押さえること  
とによって、論理の展開、評論文の構成、各段の要旨  
をまとめ、論旨の内容を把握しよう。

〈作業〉

(1) 本文の指示語に傍線を引き、記号をうって、ノ  
トに書き出す。(ページ、行も書いておくとうい。  
) ついで、指示されている内容を書き出す。文末を、  
「もの。こと。」で結ぼう。  
(2) 本文の接続語を□で囲み、記号をうつ。ついで、教科書84ページの接続語句の用法(1)～(7)に分類  
してみよう。

作者が提起している問題を、最初の段落中のことばを用いて、一〇字以内の名詞でまとめよう。

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....



この文章全体の要旨を、次の順序でまとめよう。

第一段 (初め～七三・六)

顔面ほど不思議なものはない。それは人を思い浮かべるときに

①

からである。

第二段 (七三・7～七八・12)

一節 (七三・7～七四・6)

芸術家は「人」を表現するのに「顔」だけに切りつめることができる。それは「顔」が

②

からである。

二節 (七四・7～七六・5)

「面」が真の優秀さを発揮するのは

⑧ であり

④ している「伎楽面」も舞台上で演じられるときに、生き

生きとしてくる。

三節 (七六・七〇七八・一二)

⑤ 「能面」はその顔面から

しかし、「能面」が動く、肢体を獲得したときには

⑥

それは、「面はその獲得した伎体に支配される」ために、「伎体による表現が面の表情となるからである。」

第三段 (七八・一三〇終わり)

人体から

⑦

「面」は、

⑧ 力を持っている。それは、人の顔面が

⑨ ことによる。

すなわち、「顔面」は「人格の座」を示している。

2、ここで取り入れた学習活動

発展学習として、「人間はなぜ仮面を作るのか」という問い  
に対する文章を六百字程度で書かせる学習を取り入れた。これ  
によって「面とペルソナ」で読んだことがらが、どの程度生徒

の中に浸透しているか、理解できているかを見ようとした。

ヒントとして、本文の「このような面のはたらきにおいて特  
にわれわれの注意を引くのは、面が、それをかぶって動く役者  
の肢体や動作を己の内に吸収してしまうという点である。実際

「面とペルソナ」仕上げる学習

(800字詰原稿用紙)

問題 古今東西を問わず、世界の多くの民族で、仮面が作られている。人間はなぜ仮面を作るのか。自由な発想を六〇〇字程度の文章にまとめよ。

注意

- (1) 次に掲げた仮面の写真は、参考のためのものであり、答案の作製にあたってとくにこれにこだわる必要はない。また、世界には仮面をもたない民族も存在している。
- (2) 答案にたいする評価は、次のような観点から行われる。
  - 一 発想の自由さ、あるいは卓抜さ
  - 二 論旨の明確さ
  - 三 文章表現のゆたかさ
  - 四 漢字やかなづかいの正確さ



には役者が面をつけて動いているのではあるが、しかしその効果からいえば、面が肢体を獲得したのである。もしある能役者が、女の面をつけて舞台上に立っているにかかわらず、その姿を女として感じさせないとすれば、それはもう役者の名に値しないのである。否、どんなつたない役者でも、あるいは素人でも、

女の面をつければ女になるといってよい。それほど面の力は強いのである。」あたりを必要に応じて与えた。  
また、考えは浮かんでいるが、何となく書き出しや、書き方がうまくいかないという生徒のために、文章のモデルを紹介した。

A 国語 I・II 教科書教材にみられる評論・論説教材

三省堂

国語 I

遠近法の錯覚

左右学の必要性

隔絶の時代

「こんにちには」の用法

文化としての言語

個人のシンボル

青春の遍在

ことばと私

日本人の心とかたち

漫才との出会い

自我構造の危機

労働の表象

ことばの力

「手首」の問題

沈黙の春

人間の時間

安野 光雅

堀内 四郎

高橋 和巳

水谷 修

池上 嘉彦

高取 正男

鮎川 信夫

竹西 寛子

山崎 正和

鶴見 俊輔

岸田 秀

C・レヴィストロース

松本カヨ子訳

大岡 信

寺田 寅彦

レイチェル・カーソン

青樹 繁一訳

中村雄二郎

芸術(美術)・認識論・歴史

自然科学(巻き貝の研究) 人間学

青春・人生論(変化)

言語(日本語)・コミュニケーション論

言語・文化

個人・家庭(個人意識)

青春論

言語・人生

文明・文化論

文化論(コミュニケーション論)

現代文明論(心理学)

現代文明論(労働論)

言語・人間関係(言葉と心)

科学者の研究態度

現代文明・自然科学(生態系)

(公書)

哲学(人間と時間) 文化

(一) 発見の窓

(二) 状況への発言

(三) 言語と文化

(四) 民俗のこころ

(五) ひらかれる世界

(六) 文化との出会い

(七) 現代を考える

評論 (一)

評論 (二)

B 第一 国語 I

国語 I

「家」と都市  
情報化社会をどう生きるか  
小説とは何か

上田 篤  
星野 芳郎

現代文明論（都市論）  
現代文明論（情報化社会）

評論 I

日本文化の雑種性

三島由紀夫

文学論（小説）

評論 (一)

C 大修館

国語 I

人間関係の形成  
読書について

加藤 周一  
加藤 秀俊

文化論（日本文化の特徴）  
人間関係論

七 評論 (一)

「甘え」の着想

小林 秀雄

人間関係・日本人論

十四 評論 (一)

内部と外部

土居 健郎

日本文化・日本人論（建築）

十二 日本語

日本語の表現

金田一春彦

言語論（日本語）表現の特徴

五 文章表現

ものことば

鈴木 孝夫

文章表現論

七 評論 (一)

親切な表現

坪井 忠二

文章表現論

六 文章表現

文章について

芳賀 綏

文章表現論

十五 評論 (一)

国語 II

わらべ歌

小泉 文夫

芸術論（音楽）

十三 日本語

「論理的」ということ

大森 荘蔵

論理学・言葉

六 文章表現

人間の呼ぶ声

石田英一郎

文明・文化論（原始芸術）

一 人生と言葉―随想―

日本語のころ

阪倉 篤義

言語論（日本語）

五 意見と表現

文章について

福原麟太郎

文章表現論

現代文明論

表現を選ぶ

中村 明

文章表現論

一 人生と言葉―随想―

レトリック感覚

佐藤 信夫

言語論（比喩）

一 人生と言葉―随想―

D 明治 精選国語 I

自己発見

湯川 秀樹

人生論・青春論

一 人生と言葉―随想―

言葉の力

大岡 信

言語論（日本語）

一 人生と言葉―随想―

言語と文章

谷崎潤一郎

言語・文章論

一 人生と言葉―随想―

日常性の壁

安部 公房

認識論・人間論

一 人生と言葉―随想―

命拾い

深代 惇郎

現代文明論

一 人生と言葉―随想―

明治 精選国語II

道具―人と物、人と人とを  
つなぐもの―

川添 登

日本文化の雑種性

加藤 周一

言語から文章へ

谷川俊太郎

母国語の能力

池田摩耶子

日本人の知性

中村 光夫

「見物」の精神

加藤 秀俊

言葉についての新しい認識

池上 嘉彦

機械と人間

加藤 秀俊

なまけもの論

北 杜夫

思いつめる

谷川俊太郎

金銭と精神

中村 光夫

太郎と花子

金田一春彦

―日本語の造語性―

歴史・文化論

日本文化論

文章表現論

言語論(日本語)

哲学・文明論

文明論

言語論

現代文明論

人間論

人生論

社会・文化論

言語論(日本語)

文章表現論

人間関係論

現代社会論

芸術・認識論

言語・人間関係(言葉と心)

言語論

言語論(意味の変遷)

思想・社会科学・人間関係

人生論

論理学

Ⅱ―1 文化と生活  
―評論―

5 言葉と表現

1 社会と人間―評論―

5 言葉と文化

2 現代を考える

4 論説・評論(→)

11 表現と理解

15 論説・評論(○)

4 論説・評論(→)

11 日本語の特質と変遷

13 論説・評論(○)

8 考えるということ  
―評論(→)

E 旺文社 国語I

国語II

F 東京書籍 国語I

道具―人と物、人と人とを  
つなぐもの―

川添 登

日本文化の雑種性

加藤 周一

言語から文章へ

谷川俊太郎

母国語の能力

池田摩耶子

日本人の知性

中村 光夫

「見物」の精神

加藤 秀俊

言葉についての新しい認識

池上 嘉彦

機械と人間

加藤 秀俊

なまけもの論

北 杜夫

思いつめる

谷川俊太郎

金銭と精神

中村 光夫

太郎と花子

金田一春彦

―日本語の造語性―

川本 茂雄

文脈と理解

多田道太郎

隔たり

吉本 隆明

修景の論理

清岡 卓行

手の変幻―失われた両腕―

大岡 信

言葉の力

鈴木 孝夫

天狗の鼻はなぜ高い

松村 明

犬も歩けば

丸山 真男

「である」ことと「すること」

森本 哲郎

砂漠への旅

大出 晃

サンチョ・パンサはこう考

大出 晃

えた

国語 II

日本の近代

黄色い太陽

自分の世界

美を求めぬ心

真実の百面相

雑器の美

人間とことばと

生まれて

幸福という一語

私のふるさと論

ラムネ氏のこと

暗い河の流れに

自由について

小説とは何か

人類と科学

日本人の空間感覚

古語と現代語

言葉を作る

主題と構成

聞き書きの方法

現代における態度決定

イヌの世界戦略

幸福について

中村 光夫

文化文明論

十四 思索を深める  
— 評論(一)

成瀬 武史

言語論

八 人間の探究—評論(一)

谷川 徹三

個人・文化

十四 美への開眼—評論(一)

小林 秀雄

芸術(文学論)

大森 荘蔵

哲学・認識論

柳 宗悦

芸術論

白井 吉見

言語論・人生論

淡木のり子

文学(詩) 人生論

長田 弘

言語・人生論

木下 順二

言語(方言・標準語)

坂口 安吾

人生論

武満 徹

芸術・人生論

真下 信一

思想・人生論

吉田 精一

文学(小説) 論

朝永振一郎

科学論

山崎 正和

日本人論・文化論

吉川 泰雄

言語論

大野 晋

文章表現論

宇野 義方

文章表現論

中西 一弘

文章表現論

丸山 真男

思想・社会

合泉 吉晴

社会・文明論

辻 邦生

人生・人間論

一 生きるということ

十一 現代の社会

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

十二 文化を生むもの

〔言葉の世界〕

10 評論

1 ことばと人生

1 ことばと生活

10 評論

六 愛と自由

十一 近代の小説(一)

I 右文 二 國語 I

他人の目

詩のころを読む

文脈の働き

言葉と表記

言葉の意味を知ろう

週刊誌の言葉を調べる

日本的思考の原型

自然界の表情

現代日本の開化

日本の宿命

一期一会

生きる顔つき

「ウオ」と「サカナ」

自己基準と他者基準

コモン・センスとはなにか

日本人の空間感覚

薬師寺雑感

モノ

雪月花の時

言葉で生きる

点的論理

「的」の文化

駒のいななき

大庭みな子

茨木のり子

樺島 忠夫

林 巨樹

柴田 武

寿岳 章子

高取 正男

島崎 敏樹

夏目 漱石

西尾 幹二

井上 靖

水上 勉

岩淵悦太郎

鈴木 孝夫

中村雄二郎

エドワード・ホール

佐藤信行 訳

加藤 周一

小林 秀雄

山本 健吉

竹西 寛子

外山滋比古

鈴木 修次

橋本 進吉

人生・個人・人間関係論

文学(詩) 人生論

文章表現論

文章表現論

文章表現論

文章表現論

文章表現論

社会・人間関係論

自然・心理学

文明・文化論

文明・文化論

文明・文化論

人生・言語論

人生論

言語論(方言)

言語論(人間) 論

思想

文明・文化

文明・文化

文化・歴史

芸術(絵画)

文学(漢詩)

言語・人生

言語・論理学

言語(日本語) 文化

言語(音韻)

六 青春の叙情・現代詩  
[言葉の世界]

三 論説・評論(一)

五 論説・評論(二)

一 ことばのころ

九 ことばと生活

三 論説・評論(一)

六 論説・評論(二)

一 ことばのひびき

十一 ことばの創造

J 光村

国語 I

東と西の間

ロビンソンクルソーザ経済

好きな言葉

水のごとく淡く

私の自然観

人類は滅びるか

ものと言葉

比喩について

都市の個性

日本文化の存在証明

王朝文学の世界

人生と文学

科学者と頭

憲法を読む

海上の道

新選国語 II

文章の個性について

「いま」「ここ」の発見

自立と挫折の青春像

山に行く心

科学文明の曲がり角

おそれという感情

自己を見つめる

情報への飢え

日本人の表現

梅棹 忠夫

大塚 久雄

阿部 昭

森本 哲郎

今西 錦司

日高 敏隆

鈴木 孝夫

外山滋比古

加藤 周一

山崎 正和

中村真一郎

野間 宏

寺田 寅彦

小林 直樹

柳田 国男

高田 瑞穂

杉山 康彦

高橋 和巳

吉井 由吉

中岡 哲郎

唐木 順三

真下 信一

稲垣佳世子

中村 明

文明・文化・言語

社会科学（経済・歴史）

言語（文章論）

人間関係

自然科学（生態学）

自然科学（生態学）

言語

言語（機能）

現代文明論

文化・文明・日本人論

文学（古典文学）

文学・人生

認識論・哲学

社会科学（憲法）

文明（民俗）

言語（文章論）

文学批評

青春論

人生論

現代文明論

人生・哲学

個人・青春論

心理学・人間論

言語（日本語） 言葉と心

十二 文明への視点

一 言葉の発見論

六 随想・評論

九 評論

十二 評論・論説

十三 王朝の文学

六 人生と思索

十四 現代と伝統

四 文章表現

六 自己の発見

一〇 文明と人間

四 評論(一)

九 評論(二)

L 学図

国語 I

K 尚学

新選国語 I

J 光村

国語 I

東と西の間

ロビンソンクルソーザ経済

好きな言葉

水のごとく淡く

私の自然観

人類は滅びるか

ものと言葉

比喩について

都市の個性

日本文化の存在証明

王朝文学の世界

人生と文学

科学者と頭

憲法を読む

海上の道

新選国語 II

文章の個性について

「いま」「ここ」の発見

自立と挫折の青春像

山に行く心

科学文明の曲がり角

おそれという感情

自己を見つめる

情報への飢え

日本人の表現

梅棹 忠夫

大塚 久雄

阿部 昭

森本 哲郎

今西 錦司

日高 敏隆

鈴木 孝夫

外山滋比古

加藤 周一

山崎 正和

中村真一郎

野間 宏

寺田 寅彦

小林 直樹

柳田 国男

高田 瑞穂

杉山 康彦

高橋 和巳

吉井 由吉

中岡 哲郎

唐木 順三

真下 信一

稲垣佳世子

中村 明

文明・文化・言語

社会科学（経済・歴史）

言語（文章論）

人間関係

自然科学（生態学）

自然科学（生態学）

言語

言語（機能）

現代文明論

文化・文明・日本人論

文学（古典文学）

文学・人生

認識論・哲学

社会科学（憲法）

文明（民俗）

言語（文章論）

文学批評

青春論

人生論

現代文明論

人生・哲学

個人・青春論

心理学・人間論

言語（日本語） 言葉と心

十二 文明への視点

一 言葉の発見論

六 随想・評論

九 評論

十二 評論・論説

十三 王朝の文学

六 人生と思索

十四 現代と伝統

四 文章表現

六 自己の発見

一〇 文明と人間

四 評論(一)

九 評論(二)

国語II

埋もれた古代都市  
個人の可能性

森本 哲郎  
加藤 秀俊

社会科学(歴史)・文明論

個人・人生論

四 評論(一)

東京高速を歩いた牛  
言葉の力

なだいなだ  
大岡 信

言語・人間関係(言葉と心)  
日本人・日本文化論

九 評論(二)

罪と恥

土居 健郎

新修  
国語I

アフリカで考える

川田 順造

社会科学(人間・文化)

生きていること考えること

中村雄二郎

人生論・哲学

失われた両腕

清岡 卓行

芸術・認識論(ヴィーナス)

表現(二)

批判的精神

岩崎 武雄

論理学・認識論

辞書を引く楽しみ

河盛 好藏

言語生活

八 言語

日本人の論理構造

板坂 元

言語(日本語)(自然の助動詞  
「れる・られる」)

国語II

生きているとばた

茨木のり子

文学(詩)・人生

5 随想と評論

「的」の文化

鈴木 修次

言語(日本語)・文化

この意味喪失の時代に生き  
る

大塚 久雄

現代文明論

青春

中村真一郎

青春論(文学)

10 近代の出生

明治女性史

村上 信彦

人生論(文学)

口語文体の確立

山本 正秀

文学

評論(一) 四

N  
角川 総合国語I

好きな言葉

井上 靖

言語・人生(「一期一会」)

日本人の表現

中村 明

言語(日本語)・表現(表現にお  
ける普遍)

青春の意義について

河盛 好藏

青春論

評論(二) 八

過剰の意識

中井 正一

社会・人生論

総合国語Ⅱ  
 「生きる」ということ  
 ことわざの風景  
 —「かえるの行列」—  
 人間への信頼  
 洞窟の芸術  
 逆さに地図を眺めてごらん  
 相手依存の自己規定  
 文化と言語  
 サンドイッチありますか  
 —場面とことば—  
 人間性と想像力  
 ものぐさ太郎

日本に象がいたころ

亀井 節夫

社会科学 (歴史)

評論(白) 二十

自然科学 (人間・社会)

四 評論(白)

1 人間を見つめて

人間・人生 (ことわざ)

七 評論(白) 2 状況の中で

人間・哲学

芸術・歴史

認識論

言語・社会 (日本人論)

言語・文化

言語 (敬語)

人間・認識論・社会 (想像力)

人生論

〇三省堂

(備考)

1、現行の国語Ⅰ・Ⅱの教科書のうち、わが校に見本がそろっているものについて調査した。

A～Oの十五種の教科書について調査できた。

2、教科書によって、単元構成のしかたに違いがあり、(文章形態へジャンル)によるもの、生活単元によるもの、随想・説明文などとの違いがわかりにくいものも挙がっている。ご指摘願います。

3、表の構成は、上段から出版社、教科書名、教材名(題)、筆者、大まかな内容分類、単元名となっている。

4、内容分類について、誤りが多々あると思うので、ご指摘願います。